

第3章 考察

第1節、縄文時代

1. 移動としての吹上パターン

1) はじめに

今回の調査で発見された住居数は柳坪A地区7軒、同B地区14軒、頭無18軒（うち3軒は調査未了）で、計39軒に達する。この3ヶ所の遺跡は前述した遺物内容を観察すれば理解される通り、単一時間のみの集落は存在していない。いずれの遺跡からも中部山岳地帯で言う曾利式に属する幾型式かの住居が混在しているが、重複住居は柳坪A地区1ヶ所（縄文住居2軒）、頭無3ヶ所（重複2軒づつ2ヶ所、接しているもの1ヶ所）で極めて少ない。隣県長野富士見町所在の井戸尻、曾利遺跡の住居群の大半が重複住居であるのに対し、本県小渕沢町中原遺跡、上平出遺跡(1)にしても時代差が相当あるものを除いて、ほとんど重複していない。この重複住居は遺物編年上は勿論前提として、集落変遷及び集落構造解明に必要な様々な手懸りを与えてくれる(2)訳だが、逆に重複の少ない住居群は、当然短時間の居住占地を示し、集落の基本構造を知らしめてくれるであろう(3)。しかし、単一時期の集落は多くの場合皆無であり、時間的な連続あるいは断続的居住によって埋没住居内に投棄される遺物(4)（海浜地方に於ては貝等）は埋甕との時間差があるにもかかわらず、今日まで同一時期とされてしまった例が多い(5)。一般的に井戸尻パターン(6)とは、まさしくこの例で、これを批判している下総考古学研究会の塙田光氏は住居の重複関係、床面埋設土器（埋甕、埋甕炉）、覆土中の土器の関係から土器型式及び編年の検討、再編成を企てている(7)。いずれにしても、小林達雄氏によって吹上パターンが提唱され、井戸尻遺跡群の井戸尻パターンの名命(8)以降、住居の埋没と覆土中の遺物のあり方に注意され、更に西耕地パターン(9)、平和台パターン(10)の新パターンが続々と生まれてきた。又、それに伴ってパターンの総合的的理解から集落構造の復元を追求する意欲的な論文も数多く見られた(11)が、小林達雄氏は「吹上パターン」の豊富な将来性を無視したように、パターン論の清算を行なった。(12)ここでは、元祖小林氏が自分で播いた種を刈り取るように、「“土器作り”とその“廃棄”にシーズン制の存在を想定することによって」(13)縄文世界の“宇宙”を止揚し、言葉だけの縄文世界を覗いているが、集落の定着、移動、や“吹上パターン”に於ける「第一次堆積層」の形成理由について論述せず、可児氏のみが「時間的不一致」を認識している(14)。

いずれにしても、小林氏が止揚した“吹上パターン”は今日もまだ上記2点で未知数を抱えていると言って良いであろう。したがって柳坪及び頭無遺跡の集落を語る以前に、このパターン論の方向性を示しておかなければならぬ。

2) 吹上パターンの理解

小林達雄氏が米島貝塚発掘調査で把握した吹上パターンは、すでに周知のとおり、住居の埋没過程と土器等の遺物の廃棄過程の関連を叙述したものであるが、その過程は自然現象と人工現象によって結果されている。ところが提唱者小林達雄氏はこの自然埋没過程について全く理解していない。即ち、氏は自然的埋没過程と人工的投棄過程を次のように説明する。「土器の廃棄にかかる行動の時が、パターンA（吹上パターン）に於て、竪穴住居の廃絶および貝殻の投棄との二つの行動の間に相対的に位置づけられることを知るのである。なお、土器の廃棄が土器の補充二製作と背中合せの関係にあ

り、また竪穴住居の廃棄絶は少くとも住むべき代りの新しい住居の構築をその背景にもっているのである。さらに、貝殻の投棄は、貝類の盛んな捕食を前提としている。このように、何れの行動もそれ一つで独立するものではなく、様々な行動の連鎖のなかの一環をなすものである。（中略）貝殻の投棄が春とともに開始されることからすれば、土器の廃棄は春に先駆けた頃であったということになろう。従って土器の廃棄行動と背中合せの関係にある土器を補充するための土器製作もまた春以前の季節であったといわねばならない。その時期は、竪穴住居が廃絶されてから、床面に第一次埋没土が堆積するだけの時間の経過後にある。』(15)

そこでこの説明での不明な点を列記してみたい。

- ① 廃絶した竪穴住居と新築される住居の集落内に於ける位置的関係。
- ②、第一次埋没土が堆積する時間とは春先以前、即ち秋から冬にかけての季節を示すのか。
- ③、②を前提にすると、冬期の第一次埋没土は10～50cmに達するのか。
- ④、又、②を前提とすると、秋は収穫の時であり、冬に向けての狩猟、採集、貯蔵の最も多忙な時期に竪穴住居を新築、あるいは移動することになるのか。
- ⑤、②を前提として、冬期間中土器等の廃棄はされなかったのか。
- ⑥、①～⑥までの疑問に加えて、廃絶直後の住居は第一次堆積後の住居より多量に捨てることができるが、第一次堆積土中に何故土器の投棄が無いのか。（放置されて残ったものは含まないが）。

即ち、以上の点を要約すると〈第一次埋没土の堆積中人々は何をしていたのか〉という疑問である繩文人達が冬眠をしていたと考えられない以上、小林達雄氏のように吹上パターンを「一括出土の土器と竪穴住居の炉に埋設されている土器とが同一時期の様式に属するという事実」が「竪穴住居を作り、そこに起居した人々の意識のなかに、竪穴住居跡の凹地に、土器を運んできて廃棄するという行動もまた予め含まれていた」(16)と、単絡的に結論付けることはできないのである(17)。確かに可児通宏氏が指摘しているように「〔破片の廃棄〕が土器の壊れた各時点で、任意に何回かに亘って行なわれたため」「覆土中（完形一括土器堆積面より上）にかなりのばらつきをもって存在する」(18)事実は、土器を投棄する人間の存在無しには考えられないことである。従って、一括土器の投棄以降の居住者の存在は誰もが了解しうる事であるのに対し、それ以前の住居が廃絶され、第一次堆積（自然堆積）が行なわれる間の人間の所業を解明してゆかなければならぬ。さもなければ〈第一次堆積後に一括土器を廃棄して初めてゴミ捨て場としての機能が開始され、一括土器の廃棄がその機能を与える儀式である(19)〉というような精神領域にまで届く明察をされそうである。

遺跡を埋没させる土壤の成因は、空中からの降下物と主に植物遺体の土壤化による(20)とされるが、竪穴住居跡の第一次堆積の場合、それに加えて壁の崩壊現象によって形成される。だが、余程深い住居でない限り、住居中心の炉上を10～20cmの厚さで覆うことはできず、長期間の植物遺体の土壤化による堆積を前提にしなければならないであろう。実に長野県寄助尾根遺跡に見られる発掘住居跡の凹地は20年以上の年月を経ても凹地の状態が続いており、更に第一次堆積層上が埋まるには人工作業、即ち遺物の投棄、食物カスの投棄を想定しなければならない。(21)。

住居廃絶後の第一次堆積層の形成は自然的要因であることを述べてきたが、この層に遺物がほとんど含まれていない点について、小林達雄、可児通宏両氏らは全く問題としていないむしろ積極的にシーズン制による土器廃棄の理由としているが、シーズン制に帰結してしまうことは、繩文時代の動態

を平面化して理解してしまうであろう。可児通宏氏が把え、又把えきれなかつた点に解明の鍵が存在すると思われるので、これを引用しておく(22)。

『土器の廃棄をB'（新築住居）→B（廃絶住居）と考えないで、A'（Aの新築住居）→B（廃絶住居）と考えたのは、Bへの〔完形一括土器の廃棄〕がBの廃絶後かなりの時間を経てから行なわれていることによる。即ち、〈吹上パターン〉をとる住居址においては、住居址への“もの”の廃棄は〔完形一括土器の廃棄〕をもって開始している。そこでB'→Bの廃棄を考えた場合、〔BからB'への移転〕→〔完形一括土器の廃棄〕までの間に生じた破損品の廃棄の問題が起こる。A'→Bを考えた根拠は、如上のB'→Bと他の事象との関係にみられる①時間的不一致による。

また〔完形一括土器の廃棄〕の行なわれる時点、理由については判然としないがP・H両サイクルの在り方から推定してみると次の如くなる。Pサイクルについてみると、住居址への土器の廃棄は〔完形一括土器の廃棄〕を出発点とし、それに後続して〔破片の廃棄〕が行なわれる。Hサイクルにおいては、〔住居の新設〕を出発点とし、〔住居の廃絶〕を終点とする。この終点は、次の住居の出発点と表裏一体の関係にある。従って、P・H両サイクルに於て、〔完形一括土器の廃棄〕はPサイクルの、〔新設住居への移転、住居の廃絶〕はHサイクルのそれぞれ回帰点と考えられるから、P・H両サイクルの回帰点が時間的に一致するという仮定が許されるならば、〔完形一括土器の廃棄は、新設住居への移転〕時に求められよう。（②土器、石器等の付器は、住居の廃絶に際し人とともに移動しているから、その一括廃棄は住居の廃絶後に行なわれていることは確実である）』

ここで問題となる点に幾つかあるが、まず、①の時間的不一致である。A'→Bの設定理由として掲げられる第一次堆積層の形成時間が満たされないのは何故であろうか。Aが廃絶され、A'が新設された段階で什器を全部A'に移し、Bのレンズ状凹地を選んで完形一括土器を廃棄する想定は、第一次堆積層形成時間内の人々の行動を無視した想念に近いものであろう。同じ台地上に居住し、生活を営んでいる限り、捨場としてAはBより容量が多く、かつ②で搬出する際に要、不要の選別も可能で、不要不用の什器をそのまま遺存させることによって労働の簡略化もできる訳である。ところが、この矛盾を止揚するものとして設定したく“土器作り”と、その“廃棄”的シーズン制の存在は、武藤雄六、堀越正行らの感想(23)と同じく肯首できないものであり、〈完形一括土器〉という土器のほとんどが破損品であることも充分再考に役立てなければならない。更に、住居の第一次埋没と、シーズン制による土器作りとその廃棄の時期が常に符合するように縄文世界が回転していたとは考えられない。

即ち、吹上パターンは次のように理解すべきものとしてある。

3) 移動の所産としての吹上パターン

移動とは、特に縄文時代の生業を狩猟採収経済生活と規定するならば、動植物相の変化によってひき起こされる行動と把えられる。しかし移動する前提となるものは、移動する先方の領域が、その集団の領域でなければ平安に移動することができないはずであり、とりわけ中部地方にも見られるよう、中期の遺跡の急増現象からして、一集団が単一の領域の所有だけで数百年を過していたことは考えられないであろう。そこで縄文人の行動（移動）の想定を試みてゆきたい。

まず移動の時期であるが、これは原則として春先に行なわれる。勿論収穫の無い秋も考えられる。当然夏、冬でも移動するであろうが、夏、及び秋は狩猟、採集の時期であり、冬期の為の貯蔵物を豊富に持っているため移動するには不適当である。もちろんその貯蔵物が少なく越冬できない場合には、

移動を余儀なくされる訳だが、別の領域で越冬できる食糧を得られる保障はどこにもないであろう。春は動植物、特に海岸地帯では貝、山岳地帯では植物があり、少なくとも秋までの生活は保障される訳で、小林氏の言う春の生産活動に繋がるものと言える。

この移動によって〈一括土器廃棄→土器片及び貝殻（残飯）廃棄〉が次のように説明される。

- ①、A台地からB台地への集落の移動→B台地には以前同じ集落の残した住居及び、内部には土器や石器等がある。（A台地から出発する時、そこには住居や土器等が移動中の必需品を除いて残される。）
- ②、B台地の住居や土器、石器等について、使用できるものと使用不能なものを選別し、使用できない住居は、使用できるものと出きないものに材料を分ける。この片付け作業の中で、壊れた土器は近くの凹地（以前に廃絶された住居址）に捨てる。使用できる住居は修復を行ない（この時、材料は崩壊した住居の使用できる材料を使用する）拡張、あるいは補強をする。この住居内には以前から置かれていた土器が残されているが、様々な原因によって壊れている（25）土器は凹地に捨てる。この場合に廃絶された住居は、不燃物以外のものはその住居内に残され、屋根材はマキとして使用される。同一期に幾軒も廃絶されることはないから、廃絶住居は燃料置場として使用される。
- ③、B台地での住居。凹地には不燃物の土器破片や石器（海浜地方では貝殻等）及び残飯等が投棄されつけ、凹地は完全に埋没する。
- ④、B台地から移動、①の場合と同様に行なわれるが、マキ置場として使用されていた廃絶住居はそれ以降第一次堆積層を形成し始める→凹地が形成される。

①～④について住居サイクルを中心にして土器、人間行動を要約すると次のように整理される。

人間サイクル	住居サイクル			土器サイクル
1、移動（来） 定着 移動（出） 無人	新築			片付、一括投棄、製作
	居住			製作・投棄
	放置			置きざり
	荒廃			破損
2、移動（来） 定着 移動（出） 無人	片付	新築		片付、一括投棄、製作
	燃料置場	居住		製作・投棄
	空地	放置		置きざり
	一次堆積	荒廃		破損
3 移動（来） 定着 移動（出） 無人	一括土器投棄	片付	新築	片付、一括投棄、製作
	破片等投棄	燃料置場	居住	製作・投棄
	完全埋没	空地	放置	置きざり
		一次堆積	荒廃	破損

* 1と2の移動の間に修理、あるいは拡張等の住居サイクルが存在するので、新築から完全埋没の間には4～5回の移動、定着が考えられる。

このように短時間のうちに移動を繰り返した場合、集落を把える方法としての土器型式による住居

選別はほとんど不可能になるが、埋甕と覆土中の土器の時期が比較的近い時代である場合に時期区分する根拠として有効である。

すでに了解されていることではあるが、ここでの移動とは、高橋 譲氏のように(26)遺跡間の連続的移動を説くものではなく、むしろもっと短時間の内に繰り返されたところの移動についての解明を試みている訳であるが、どの遺跡でも同一テンポで移動を行なっていた訳ではないだろう。又、その地域によって領域の範囲や、セツルメントパターンに支配された構造との複雑な結合、及び相互性として把えてゆかねばならないであろう。

移動を繰り返す前提として、一集団は幾つかの領域を所有していなければならぬが、中期末葉の中部山岳地帯に於ては次のような仮説を提出しておいた。

「近接する 2 集落は（茅野和田東、西遺跡・尖石、与助尾根遺跡等）は 1 領域を交互に管理する共同体ではないか。茅野和田東、西遺跡の住居数変遷はそのことを物語っている。A 領域動植物増加率、（1 年）を X とすると収穫数 Y は $X \geq Y$ でなければならない。しかるに、集団 a の（人口）増加は常に X に近付こうとするし、X は自然条件の変化により少なくなることも多々ありうる。したがって、 $X \geq Y$ は不定期に $X \leq Y$ となり、集団 a の生計を脅かし、遂には A 領域からの移動を余儀なくさせたであろう。a 集団の去った A 領域は空白地とはならず、a 集団と同族の、a 集団より人口の少ない b 集団によって管理される。b 集団は $X \geq Y$ ではなく、 $X > Y$ の収穫によって生計できる集団であり、 $X > Y$ の生産活動によって X の増加を計り、減少した X 量を a 集団が維持できる量に増す役目をもつている。」(27)

この仮説は具体的に遺構の関連性を追求する方法論をも求めているのであり、中部山岳地帯のみならず、関東貝塚群の解明に於ても有効な方法となるであろう。後藤和民氏は、千葉市貝塚町貝塚群の時期的連続性に着眼し、集落の定住生活を知る上で重要な遺跡群として保存活動をしておられるが(28)、中期に属する 2 遺跡のうち荒屋敷遺跡が馬締形貝塚で、荒屋敷北遺跡が点列状貝塚、又、後期の草刈場遺跡がほぼ環状貝塚で、同期の草刈場南遺跡が点列状貝塚であることは、それぞれの時期に、貝の採取活動が少なくとも 2 集団の相互管理によって維持されていたことを示すものではないだろうか(29)。

領域の管理体制の問題にまで立ち入ってしまったが、これらは集落論と密接な関係として稿を改め、後日の発表としたい。

2. 土器型式について

柳坪 A、B 地区及び頭無遺跡から検出された縄文時代の住居 36 軒から発見された土器群は非常に豊富なものであるが、その時期は縄文時代中期末葉から後葉に位置付けられるものである。出土土器の文様構成及び器形から大部分が大枠として井戸尻編年の中に組み込まれるべきものであるが、関東編年での加曾利 E 式に酷似する一群の土器も併存して発見されている。

しかし、これら井戸尻編年及び関東編年での住居時期決定を行ない、短絡的に一時期の住居群=一集落と結論する前に、特に中期後半の埋甕設備住居を基本とし、床面、覆土に土器を分けて時間的な照合を行なってゆくことが正論かと思われる。そこで、井戸尻編年による区分を利用し、6 時期に分けた。I 期は曾利 I 式以前、II 期は曾利 II 式、III 期は曾利 III 式を 2 分して前半、後半と分け、IV 期は曾利 IV 式に、V 期は曾利 V 期とした。

表2で示した土器型式の分類は「井戸尻」(1)から援用したもので時期決定を行なった。従ってこれら中間に位置するものについては、その文様構成を考慮して近いものの中に含めた。元来土器型式は概念的であって、実際には常に流れを持ち続け、その流れの中で変化してゆくものである限り、一刀両断的に分けることは出来ないものではあるが、中核をなす土器群、器形、文様構成によって時期を区分することができ、又、そうした方法によって編年が組まれて来たが、その中核をなす土器群とは一体どのようにして把え得るものであろうか。住居の廃絶と土器等の投棄については前述したように当然時間差を前提とすべきものであり、又埋甕と床直の土器の時間差（製作時差）も考慮に入れなければならない。

しかし、こうして製作時差の問題まで追求するには土器胎土組成、施文工具の同一を証明してゆかなければならぬのは必定で、現状では困難であることを認めざるを得ない。

埋甕と床直一括（直立及び倒立）の土器を出土している住居はY A 10、Y B 3、10の3軒がある。Y B 3号には埋甕が2個あるが、いずれも底部を欠いて直立しており、その性格はやや問題があるが、住居に伴うものとして良いだろう。Y B 10号の3個の倒立した土器の1個は壁上から住居内に倒れ込むように傾斜し、他の2個は直面に密着して倒立してあったが、移動の場合に土器を直立させて置くより、倒立させた方が安定度が高いことは肯首できるものである。K 12号では石囲炉内中央に置甕が存在し、K 3号では焼土直上に底部2個が発見されているが、製作時間差を器形及び文様で考察するには困難と言える。

表2で示した埋甕、床直一括、覆土一括、破片等の時間差追求には多くの問題点があり、井戸尻編年では十分に把握しきれないことを今後の整理課題としてゆくつもりである。(末木)

(註)

- (1) 拙稿 1974、「山梨県中央道埋蔵文化財調査報告書」山梨県教育委員会
- (2) 中部山岳地帯の井戸尻編年とは、すでに周知のとおり、こうした方法によったものである。
- (3) 神奈川県川崎市潮見台遺跡で発見された9軒の住居址中全部が住居南、あるいは南西部入口部に正位の埋甕を設置していた例は、加曾利E II式（曾利II式）に比定されるものとして、「埋甕の偏在」観念を払拭するに充分なものと言えるであろう。
- (4) 即ち吹上パターン、あるいは西耕地パターン
- (5) 戸沢充則、1966、「諏訪山遺跡」大和町教育委員会
- (6) 小林達雄（1965、米島貝塚）によって名命されている。又、藤森栄一、及び武藤雄六らは富士見町遺跡群の調査の中から、「上になった家は下にあった家を重なった部分だけ埋め立てて貼床をつくる。又、新しい家が古い家の床を切り込んでいる。たとえ1日の差でもこの新旧は絶対である」として、組み立てられた出土土器→一括セット→一型式へと集約され「井戸尻」報告書の出版となっている。
- (7) 塚田 光、1969、「下総考古学研究会の歩み」考古学研究16-2
- (8) (6)と同様
- (9) 白石浩之、1969、「西耕地パターンの想定」発掘者No.6 2（未読）
- (10) 可児通宏、1969、「住居の廃絶と土器の廃棄」多摩ニュータウン遺跡調査報告VII
- (11) 長崎元広、1970、「吹上パターンの諸問題」ふれいく10号
長崎元広、1971、「方法論ノート」
堀越正行、「パターン論の清算」共同体の基礎理論所収
樋口昇一、1971、「土器廃棄に関する問題ーとくに“吹上パターン”を中心としてー」信濃24-12
可児通宏、(10)と同様、他、
- (12) 小林達雄、1974、「縄文世界における土器の廃棄について」国史学9 3号
- (13) (10)の註⑥より引用 (16) (12)と同様
- (14) (10)の註⑤P、115 (17) (15)と同様
- (15) (12)と同様 (18) (10)と同様
- (19) 可児通宏も指摘しているように「一括土器廃棄→継続的廃棄」が観察されるが、その理由については不明としており、この点については本文で検討してゆきたい。
- (20) 小林 清、1974、「遺跡上の堆積土壌の成因と生成」考古学研究8 2
- (21) 関東貝塚から発見される住居の堆積層のあり方は、中部山岳地帯の住居覆土にもあてはめることができると思われるが獸骨等は酸化されて遺存しない。
- (22) (10)註⑤より引用 (23) (11)と同様
- (24) 各時代の領域の広さによって移動方式が変化するわけで、特に中期の急増、前期・後期などの過疎的現象との差は当然考え得るであろう。
- (25) 例えば建築材料が腐って家が壊れたり、獸に荒されたりして
- (26) 高橋 譲、1965、「縄文時代における集落分布について」考古学研究4 5
- (27) (1)と同様
- (28) 後藤和民、1974、「東京湾東岸の貝塚群とその保存」考古学研究8 2
- (29) 貝塚と遺物包含地の割合が約46%であることが千葉市史（1975）で報告されている。貝塚形成地と包含地が隣接している場合も多く存在するが、まだ未調査地区の山林内に多くの包含地の存在が期待される。千葉県等の調査は從来貝塚中心であった為に、遺跡の発見のかたよりが見られるものと考えている。